

1951~1955 トヨタ ジープBJ



トラック用エンジン搭載の
タフなヤツ

現行モデルのイメージからするとかけ離れたイデタチのクルマ。質実剛健のデザイン、物資不足の時代の象徴であろうか。実はどちらも正解で、自衛隊の前身である警察予備隊への導入を目指し、手持ちの4tトラック用B型エンジンを小型トラックのラダーフレームに組み合わせたジープ型モデルとして1951年にデビューしたトヨタジープBJ型。これこそ半世紀以上続くランクルの記念すべき第一歩なのだ。そして扱いやすいエンジンとタフなラダーフレームの組み合わせは今も受け継がれる伝統のひとつ。

余談だが、警察予備隊の車両は信頼性の高い自家ジープが採用されたという。今でこそ信頼性のトヨタも昔はあと一歩だった。否、もしかしたら当時もわがまま大統領がいたのかも？

1955



トヨタの名車たち | トヨペットクラウン RS型

トヨタの看板車種の双壁をなす1台といえどクラウン。1955年1月1日発売と縁起のよいクルマと茶化してしまいがちだが、当時のエンジニアの情熱がぎゅぎゅりと詰まったクルマ。純国産にこだわり、オーストラリアのラリーにもトヨタ自販から出場するなど日本初、トヨタ初の看板を背負っていた動く歴史事典ともいえる。当初からタクシーモデルも存在。このデザインをモチーフにしたプログレベースのオリジンというクルマも今は懐かしい。

写真提供/トヨタ博物館

座り心地は見た目通りだが乗り心地は想像以上に良いという。後席への乗降を考えて前席は折りたたみ式になっている。飛び乗った方がカッコイイと感じてしまうのは私だけ？



BJのペダルはABCに加え、ヘッドライトの上下切り替えスイッチもフロアにある。また、フロントフード中央の突起物はラジエターキャップ。整備性を重視する機能美こそカッコイイ。

トラックベースの恩恵で様々な用途に対応できたBJ。スベアタイヤも背面式や吊り下げ式など大相撲の技のごとく豊富に対応。



1951

- ・第1回NHK紅白歌合戦をラジオで放送
- ・500円札(岩倉具視)発行
- ・第1回プロ野球オールスター戦開催
- ・サンフランシスコ条約調印
- ・明治ミルクチョコレート発売

1952

- ・GHQ廃止
- ・血のメーデー事件
- ・マジックインキ発売
- ・永谷園の「お茶づけ海苔」発売
- ・アメリカの水爆実験成功

1953

- ・GHQ廃止・血のメーデー事件
- ・マジックインキ発売
- ・吉田茂首相「バカヤロー」発言。
- ・その後解散(バカヤロー解散)
- ・阿蘇山爆発(5人死亡)
- ・エベレスト初登頂に成功
- ・赤色公衆電話が東京都内に登場
- ・アメリカの水爆実験成功

1954

- ・国鉄青函連絡船「洞爺丸」遭難。死者・行方不明者1155人。
- ・太平洋のビキニ環礁で行われた水爆実験で、日本の「第五福竜丸」が被ばく
- ・武田薬品から「アリナミン糖衣錠」発売
- ・日航が初の国際線を東京-サンフランシスコ間で開設

1955

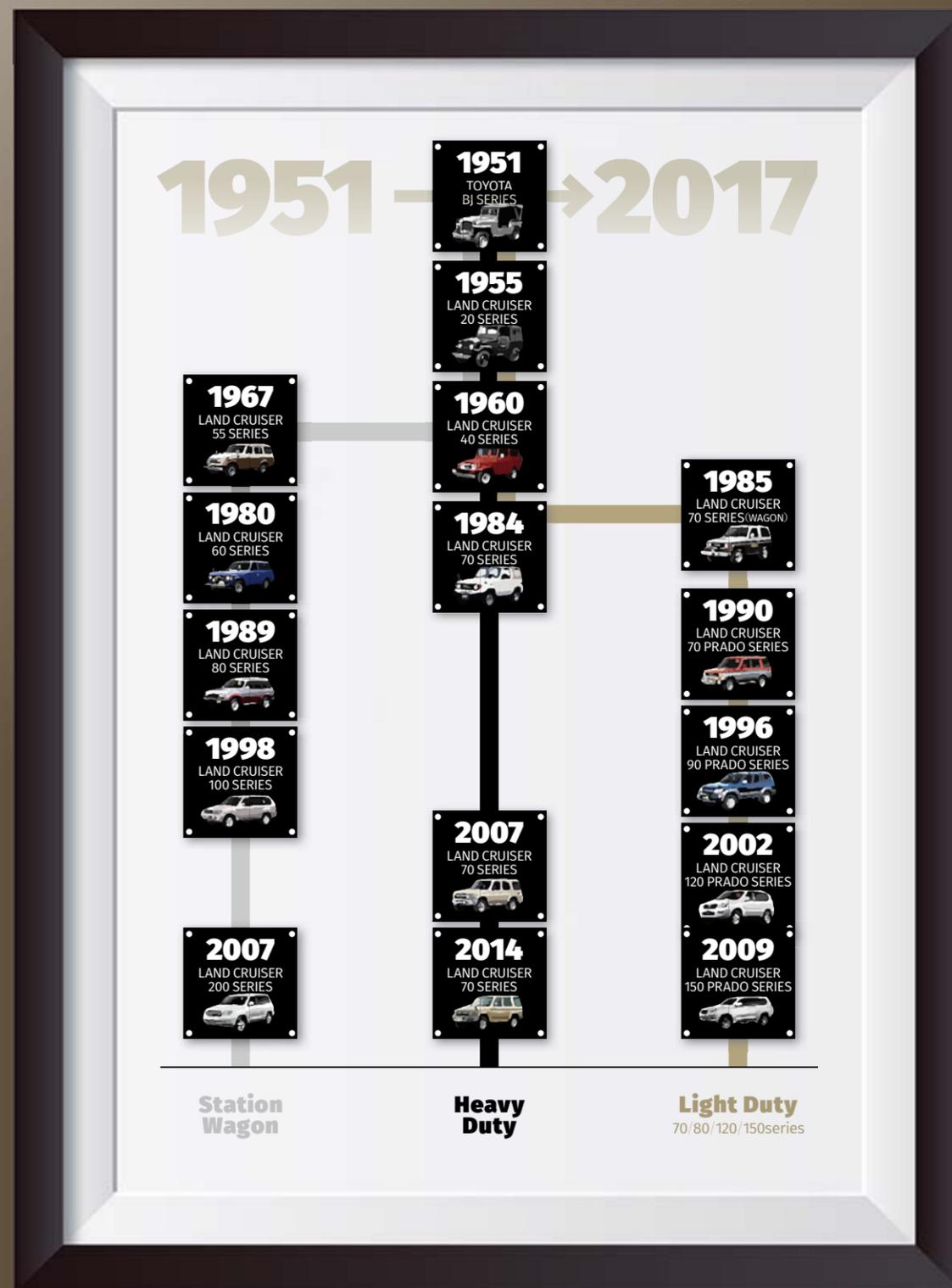
- ・初のアルミ貨である1円玉が発行
- ・50円ニッケル貨発行
- ・森永粉乳中毒事件起こる
- ・後楽園ゆうえんちが開業。
- ・日本初の本格的ジェットコースター登場
- ・ジェームズ・ディーンが交通事故死。24歳
- ・ソニーよりトランジスタラジオ「TR-55」発売

1956

- ・日ソ国交回復
- ・セイコー自動巻時計発売
- ・石原裕次郎が「太陽の季節」でデビュー
- ・気象庁発足

LAND CRUISER 陸の巡洋艦 60年の歩み

陸上のどんな道も快適にクルージングできる。ブランドやグレード名でない相応しい名前をもつ。それがランドクルーザー。「ランクル」の愛称をもつこのクルマはトヨタの歴史でもある。



写真/トヨタ自動車 文/海野大介

【80系】 80series 徹・底・解・説

「ハチマル」



Detail



エンジンは1FZ-FE。総排気量4476ccから215PS/4600rpmの最高出力、38.0kgm/3200rpmの最大トルクを発生。余裕のクーリングがこなせる人気の高いエンジンだ。高級車ライクのインパネ周りは80の特長のひとつ。扱いやすいスイッチ類も魅力。タイヤサイズは275/70R16。中古車両はサイズアップやメッキタイプのホイールなどに換装されているパターンが多い。メーターは視認性に優れたアナログタイプ。タコメーターは左側に装備。サンルーフはシェードが付いたチルト&スライドオープンタイプ。

身長176cmの男性が乗っても余裕がある。アームレストは収納式。広大なスペースとあいまってゆったりと座ることができる。ラゲージルームも広大。俗に言う分割可倒式となっており、収納物によって片側だけ倒すこともできる。可動はレバーを引いて2アクションするだけ。フルフラットにすれば大人が余裕で横たわることが可能。テールゲートは2分割式。小さな荷物では上部だけ開ければOK。ディーゼルエンジンはサードシートのない貨物車登録となる。取材車両はLEDのカーゴランプが取り付けられていた。



Detail



お宝
シングル

80系の中古車情報

活況ともいえる80系の中古車市場。ノーマル車両はほとんどなく、ほとんどが何らかのカスタムを施している。近年の人気はより旧車っぽく見せる「クラシックスタイル」だ。



1993年式 ランドクルーザー80 4.2 VX リミテッド ディーゼルターボ4WD / 走行距離11.7km、排気量4200cc、ニューペイント、新品3インチコイル&プロコンショック、新品メゾットレーシングAW315タイヤ。価格229.8万円(ランクル福岡 ☎0066-9681-7526)



1995年式 ランドクルーザー80 4.2 VX リミテッド ディーゼルターボ4WD / 走行距離18.3km、排気量4200cc、後期型ディーゼルターボ、サンルーフ、ニューペイントカーキ、FUEL17インチアールミ。価格189.8万円(ランクル石川店 ☎0066-9681-7140)



1993年式 ランドクルーザー80 4.2 VX リミテッド アクティブパッケージ ディーゼル 4WD / 走行距離13.7万km、排気量4200cc、ウッドコンビハンドル、DEAN16インチ、ナローボディ、角目4灯仕様。価格199.8万円(ランクル南大阪店 ☎0066-9681-7860)



1993年式 ランドクルーザー80 4.5 VX リミテッド4WD / 走行距離11.6万km、排気量4500cc、NEWペイントマットブロンズ / ブラック、新品パーツ フルコンプリート、MGデーモンAW&TOYO マットタイヤ。価格179.8万円(ランクル名古屋店 ☎0066-9681-7203)



形式別にチェック & 詳細解説

LAND CRUISER Buyer's Guide

新車で買えないヴィンテージモデルを大胆かつ、慎重に。ワクワクしながら探さずべし

登場から現在に至るまで多くの系統を生み出してきたランドクルーザー。それだけにチョイスが難しい車種とも言える。ここではバイヤーズガイドとして中古車市場の状況、クルマの解説、そしてチェックポイントまで多角的に検証した。

この方に聞きました!
フレックス商品部
岩本 拓也さん



ぜっ 絶 版 ぱん

60系の後継として1989年~1997年の間生産された80系。最大のポイントはリーフリジットからコイルリジットへとサスペンションが変更された点。この変更により乗り心地と走行安定性が向上した。ボディの設定は56系、60系と同様の4ドアロングボディのみとなっている。写真の車両はリフトアップされた1995年式。サイズに関してはカタログ値を参照としている。



いま、一番のおすすめは80系!

全長4820mm

全幅1830mm

全高1860mm



Detail

シートはモケット地で柔らかな感触が特長。運転席には電動のランバーサポート機能が備わっていた。リヤシートも前席と共通素材。大人が座っても膝&頭のクリアランスは充分に確保されている。4WDへの切り替えはATシフト横のセレクターで行なう。エアコンはオート式スイッチ類は集約されとても扱いやすい。オーバーヘッドコンソールには方位計&高度計が備わる。

1951年に登場した「トヨタジープBJ」に端を発するランドクルーザーの歴史。その歴史は日本のクロカン史と重なっていると言っても過言ではない。そうした歴史を持つクルマだけに人気も非常に高く、中古車市場では常にその動向が注視されている。現在、ランドクルーザーの現行型は2000系と言われるもの。堂々とした体躯に圧倒的な走行性能、そして豪華な室内が魅力となっている。この2000系に関しては、登場からまだ年月があまり経過していないこともあり、中古車としてセレクトする際にはまだタマ数不足である。そうすると60、70、78ブラド、80、100系辺りがスライトスポットと言えるのではないだろうか。各系の解説をする前にスベシヤ

80系はここをチェック!



Check!!

いくら外装がキレイでも下回りの状態が良くなければ、その後、莫大な費用が掛かるリスクが高まる。特に見るのはエンジン下のオイル漏れ、シャーンの錆の存在だ。ランクルの場合、カスタムされている個体が多く、特にリフトアップされているものが多いという。ブーツ切れやオイル漏れをしっかりとチェック。ドアミラーは収納できなくなるトラブルが多いという。パワーウインドウはウィークポイント。しっかりと確認。また、試乗は必ず行なうこと!!

リスト、フレックスのランクル店の商品部である岩本さんに現状を確認してみよう。「中古車の動きは60、70、78ブラド、80などが、タマ数が減ってきており、これらは年々価格が上昇傾向にあります。ですからこれらの購入をお考えの方は早めに購入することをオススメします。クルマの傾向としてはほぼカスタムが施されているパターンが多く、その定番はリフトアップされたものの現状、一番動いているモデルは価格が比較的安い80系です。同車の魅力は色々なジャンルでカスタムできる点です。特に人気があるのがクラシックに仕上げるカスタム。80系なら比較的簡単にできますから、価格というランクルらしさを味わえる入門編として、初めてこ

手のクルマを購入する方にもおすすめです。この80系の人気はしばらく続くとも見えています。ランドクルーザー全体に言えるのは、走行距離と程度がそのまま価格に反映しているという点です。また購入に関しては、前オーナーがどのような使い方をしていたか、使用地域などを把握しておいた方がいいでしょう。海風、融雪剤などの影響で下回りの錆がひどいものは修理にかなりの金額が掛かってしまいます。もちろん、キチンとメンテナンスしてあるクルマもあります。でも一番大切なのは手前ミソになってしまおうのですが、知識に長けたスタッフのいる専門店などで購入することが一番だと思います。

メルセデス史上 最強SUV

いつかは乗ってみたい！
いや、無理なら試乗だけでも……。
そんな憧れのラグジュアリー系の
高級SUVを紹介しよう。
圧倒的、規格外な存在感。
まさにSUVのファーストクラスだ！

文/川端由美
© Daimler AG



「G63 AMG 6×6」
や「G500 4×42」と
いった本格派オフロ
ーダーを姉妹に持ち、
450mmもの地上最低
高を誇るがゆえに、
巨大な障害物でもな
んなく乗り越える。



メルセデスAMGの最上級を担うSUVらしく、上質な革や最新のエンタテインメントシステムが奢られることに加えて、後席のプライバシーを保つ工夫がなされる。

メルセデス-マイバッハ G650ランドレー

価格未定(48万ユーロ:約6000万円以上か!?) 日本発売未定

最高出力630ps/最大トルク1000Nmもの強大な出力を発揮するメルセデスAMG製ターボ付き12気筒エンジンを搭載し、オンロードでもオフロードでも敵なしの走りっぷりを披露する。



圧倒的な存在感！
気分は王侯貴族！

マジか!? 自動車キョーカイ
きつてのオサレなモーターショ
ーとして知られるジュネーブ・
サロンで、マイバッハ初のSU
VであるG650ランドレーを
目にしたときの正直な感想だ。
とにかく、デカイ!メルセデ
ス・ベンツのハイエンドを担う
マイバッハ・ブランドから初め
てSUVが登場するという噂は
聞いていたけれど、まさか、こ
れほど巨大で圧倒的な存在感の
クルマだとは想像していなかつ
た。5345mmの全長を誇り、2
235mmと、見上げるほどの巨
大な高さである。ドア・パネル
をガシッと開けると、タラップ
が降りてきて、車内へと誘い込
む。……と書く優雅に聞こえ
るかもしれないが、実際にはこ
こに足をかけてえいっと運転席
によじ登るしかない。

さらに、リアエンドには開閉
できる幌が備わる。実はこれが、
このクルマのキモなのだ。車名
の「ランドレー(=Landulet)」
とはフランス語由来で、クーペ
やセダンのようなボディ形状を
表す言葉だ。G650同様、前
半のみハード・ルーフで、後半
は幌のようなオーフントップを
意味する。実際、教皇や王族が
パレードするときに、メルセデ
ス・ベンツのランドレー仕様の
に乗るシーンをみかけることが
ある。実は、セレブ御用達のマ

イバッハラらしい仕様なのだ。
実際、上質な革が奢られた豪
華なインテリアに包まれている
と、王侯貴族にでもなった気分
だ。前席と後席の間はパーティ
ションで区切られており、ボタ
ンひとつで不透明に切り替えて、
プライバシーを保つこともでき
る。大型モニターによるエンタ
テインメント・システムや後席
専用エアコン、さらにはマッサ
ージ機能も備わり、まるでファ
ーストクラスの座席のようだ。
99台の限定で、価格は48万ユー
ロ以上と予測。いい意味で、常
識はずれのSUVだ。



「G」をベースにしただけに、オフロードの性能はお墨付きだ。メルセデス・ベンツいわく、今回のG650ランドレーでは、忘れ得ないオフロード体験を提供するという。





フジョー 3008
 車両本体価格354万円～
 @フジョーコール
 ☎0120-840-240



先進的な3D LEDリヤコンビランプをはじめ、ウインドウとの一体感を抱かせるブラックルーフを採用するなど非常に凝ったデザインだ。ルーフ下のシルバーラインもスポーティな印象を強めている。

ライオンの眼差しは タフネス & エレガンス



2017年を「SUVイヤー」と位置づけているフジョーは、昨年秋にコンパクトな2008をマイナーチェンジさせ、3月にはスタイリッシュな新型3008を投入。さらに発表会では新型5008も参考展示した。3008を通して新世代フジョーSUVの魅力に迫る。

文/塚田勝弘

アグレッシブでもあくまで センスフルな都会派SUV

今年の3月に発売された新型フジョー3008は、デザイン面で、後々エポックな一台として語られるはず。タフではあるが泥臭さはなく、あくまでフランス流のスタイリッシュな姿には思わず釘付けになる。

「New i-Cockpit」というコンセプトを採用したインパネも外観同様に先進的だ。ドライバーの眼前に12・3インチのデジタルディスプレイを配置し、速度などの運転に必要な情報を表示。中央にはナビやエアコンなどが映し出される8インチタッチスクリーンを用意し、快適なドライブに欠かせない機能を指先で操作できる。スマートな見た目どおり駆動方式は2WDのみで、4WDは設定されていない。それでも、175mmの最低地上高に加え、「アドバンスドグリップコントロール」

と呼ばれるトランクシジョンコントロールを採用。滑りやすい路面でも安心して走れるだけでなく、運転の難しいオフロードの急坂でも、自動的に安全な速度にコントロールしてくれる「ヒルディセントコントロール」を新たに装備するなど、本格的な悪路走破性能も実現している。エンジンは1・6Lターボに6ATの組み合わせで、スムーズな走りを手に入れているだけでなく、パドルシフトにより、いつでもアクティブなドライビングが楽しめる。さらに、今年の8月以降には、フジョー3008や508で支持を集めているクリーンディーゼルのターボ仕様も追加される。実用性では、SUVのキモである荷室の広さが美点のひとつで、520Lという大容量に加えて、テールゲートを開けた際、2段階の高さが選択できる。高くすると、開口部と面が揃い、低くすると段ができる代わりに、ラゲッジルーム高

ドライバーの視線移動を抑制し、操作性も向上させた「New i-Cockpit」の採用は新型3008のハイライトのひとつ。フジョーお馴染みのパノラミックサンルーフは、電動メッシュシェード付で開放感と快適性を両立。



先代よりも88L拡大した荷室はスクエアで使いやすく、後席はワンタッチで前倒しできる。両手がふさがっている際に便利なハンズフリー電動テールゲートで、バンパー下に足を入れる動作ですること作動。



3008GT Blue HDI

昨年の導入以来、クリーンディーゼル仕様が人気のフジョー。新型3008にも待望のディーゼルが8月以降に加わる。180ps/400Nmを誇る2.0Lディーゼルトーボは、6ATとの組み合わせで力強い加速と18.7km/LというJC08モード燃費を実現。車両本体価格は426万円。が稼げるなど、積載のしやすさにも配慮されているのもポイントだ。全長4・45m、全幅1・84m、全高1・63mという日本でも扱いやすいサイズに収まっている新型フジョー3008。都市型SUVの新星は見逃せないインパクトに満ちている。



直立したフロントマスクに大型グリル、鋭いフルLEDヘッドライトを配置。フジョー308と同じEPMプラットフォームを使用し、全く異なる造形美を構築した。



Truck, 1/4t. 4x4 Chronicle

SUVのルーツはここにあり! 軍用車クロニクル

近頃、街中で頻繁に見かける各種SUV。その存在は、ユーザーのライフスタイルを反映するアイコンともなっている。しかしそのルーツは軍用車輛、特に第2次大戦中にアメリカ陸軍が採用した4×4の1/4tトラック、通称“ジープ (Jeep)”に求められる。SUV史を語る上で欠かすことのできない、軍用車輛の歴史を追ってみよう。

菊月俊之 (軍事評論家)

Jeep



「第1章」馬から車へ

現在、陸軍の移動手段は自動車为主役だが、その登場以前に活躍したのが馬で、古代から兵士や物資の輸送に使用されてきた。この状況を変えたのが第1次大戦(1914~18年)で、自動車やオートバイが

馬に代わるものとして登場する。第1次大戦は自動車が本格的に使用された最初の戦争で、中でも1914年9月の「マルヌの戦い」では、フランス軍が徴用したパリのタクシーで多数の兵士を

前線まで運んでいる。とはいえ、この戦争で使用された自動車は救急車、あるいは参謀将校用が大半。輸送用トラックも多く使用されたが、馬に取って代わるには至っていない。しかし自動車は軍の首脳に強い印象

を与え、戦後には移動距離と機動力増大のために機械化が検討される。そして、その中から偵察や人員物資の運搬が可能で小型車輛の必要性がクローズアップされ、これがジープの誕生へと繋がった。

実はこれはジープが最初ではなく、蒸気自動車時代に存在している。アメリカで最初に実用的な4×4車を開発したのは鍛冶屋から車大工となったオットー・ザウコフで、1908年に第1号を製作。その翌年にFWD A

テストの結果「4×4は野戦や補給に使用できる唯一の車輛」と絶賛。第1次大戦中に多数のトラックをFWD A社に発注している。そして戦後には複数のメーカーが4×4車の生産に参入したが、その開発に大きく貢献し

4×4の登場

社(フォード・ホイール・アンド・ライプ・オートカンパニー/現在も操業中)を設立した。アメリカ陸軍は同社の4×4車に注目し、

たのがマーマン・ハリントン社で、機動性の高い4×4トラックを発売。陸軍もこれに興味を示したが、予算削減で少数が

購入されたにすぎない。しかし同社は軍に4×4車の優秀さを証明してみせ、これが後のジープ開発で4×4が必須条件とされることになる。

ウイリスMB



軍馬(騎兵と輜重部隊)



軍馬とオートバイ



特別取材

赤の ジムの 一丁

東京消防庁
装備部航空隊
航空消防救助
機動部隊所属

写真／油科康司(WP) 文／下川冬樹 取材協力／東京消防庁



航空消防救助機動部隊 —Air Fire Rescue Task Forces—

今年、発足50周年を迎えた東京消防庁航空隊は、「空の消防」の最先端を担い続けているが、近年の災害や今後の首都直下大地震に備え昨年1月、新たに空からの救助に特化した専門部隊、航空消防救助機動部隊（エアハイパーレスキュー）を発足。その一員として今後の活躍に期待されているのが赤のジムニーだ。